6. 入学試験競争に対する適応態勢

下程 勇吉　正木 正　倉石 精一*
梅本 堯夫**　高瀬 常男　田中 昌人
笠尾 雅美　安原 宏

目　次

6. 1. 問 題
6. 2. 調査計画
6. 3. 結果の考察
6. 3. 1. 入試学験に対処する態度
6. 3. 2. 受験生活の実態
6. 3. 3. 受験に関連する意見
6. 3. 4. 現行入試制度の改善意見
6. 4. 結 語
6. 5. (附) 受験神経症傾向の分析
6. 5. 1. 受験神経症インヴェントリー
6. 5. 2 予備校生徒の受験神経傾向
6. 5. 3. 受験神経症傾向の因子分析

6. 1. 問　題

わが国における大学入試制度は固有の社会的事情と相俟って，試験地獄と称される入学難の現象を招来し多くの識者を憂慮させている。しかしこの困難を打開するには，思いつきや，簡単な行政措置で解決できるものではなく，その関連するところは実に多方面にわたって居り悪循環を断ち切るのは容易ではない。この事情は前の各章にのべられているが本章においては大学入試に当面している青年達がこのためにどのような影響をうけ，またこの事態にどのように適応しようとしているかを考察したい。

現在の大学入試は高校以下の諸学校に直接間接の影響を及ぼして居り，教育計画も入試中心に偏向しがちだと憂えられているが，当面の受験者たちの生活にはどのような弊害が生じているであろうか。調査をするまでもなく，多くの有為の青年が単に入学を待つために足ぶみしていることが社会の損失であることは明白である。年年入学者中の浪人率が高くなっていることは有能者が足ぶみさせられていることを意味する。この現状に対し受験生たちはこれをどのように感じまたどのように行動しているであろうか。

現行の入試の方法は，資格試験のような印象を与えながら実は単に入学序列をきめるだけの手段でしかない。入試問題はそれぞれ相当に吟味されたものであっても，個個の問題解答の成否が入学資格の基準になるのではなく，また一学科のある限度の得点が合否の基準になるので

* 6. 1. より 6. 4. までの執筆者
** 6. 5. の執筆者

もなくて，総点が序列をきめるだけである。その総点も何点以上が資格があるときめるものではなく，定員の線で打切るのが慣例となっている。入試成績と進学後の学習成績との相関はあまり高くないので，入学試験は教育診断の意味で適性者を選抜するための資格試験としては充分な根拠をもっていない。

このような試験ではあるが，この競争における成功・失敗は合格・不合格の喜び悲しみをこえて，不当な優越感・劣等感にまで発展しがちであるのは，精神衛生の上でも望ましいことではない。このような入試のあり方について受験生達はどのように考えているであろうか。

これらがわれわれの分担した当面の問題であるが，以下これに対する調査の概要を報告する。

6. 2. 調査計画

以上に述べた問題点にもとずいて，われわれが追究しようとするところは，受験を目指して日夜勉学につとめる青少年の生活感情や入試に対する態度および意見にかかわるものである。このような心理学的次元に深い結びつきをもつ事態を，より精確に把握するためには個個の青少年と面接するインターヴュー・メソッドが理論的に最も適切な方法とされるであろう。しかし，この方法は多大の時間と労力を要するものであって，われわれがおかれた現実の制約の下ではとうてい採用できない方法であるし，また調査の第一段階におけるわれわれのねらいは質問紙法で十分達成されると判断されるのである。かくて，調査方法としては現実的に最も妥当な方法であるとして質問紙法を採用することにした。

表1　質問内容の分類と項目数

質問内容の分類 ＼ 対象	予備校生・高校生	大学生	父兄
Ⅰ　入試に対処する態度	9	5	5
Ⅱ　受験生活の実態	36	10	—
Ⅲ　受験に関連する意見	5	4	4
Ⅳ　現行入試制度の改善意見	3	—	3
Ⅴ　入試に関する自由記述	—	1	1
Ⅵ　記入者の条件	4	1	6
計	57	21	19

調査の対象は，受験に対する適応態勢という点からは最も深刻であり，現行の入試制度が何らかの弊害や問題を提起しているならば最も顕著に現れているであろうと予想される大学受験生を採りあげることにする。すなわち，過去において入試に失敗した経験をもち現在なお進学の望みを捨てていない予備校生徒，それにはじめて大学入試に臨もうとする高校在学生の2群である。この大学受験生を主な対象として，他に受験生を子弟にもつ父兄および既に入試の難関を突破した大学生をも調査対象に加える。受験生をかかえる父兄は入試に対して局外者ではあり得ず何らかの形で入試に対処する適応態勢をとらざるを得ないであろうし，既に受験生活を終えた大学生は予備校生や高校生とは違って受験準備時代の全体について語ることのできる立場にあるのである。この2群を対象にすることはわれわれの調査意図に対して有益なデータを齎すであろうと考えられるのである。

このような調査計画の大綱にもとずいて具体的には以下のような手続きがとられた。

予備校生・高校生に対する質問紙は同一形式のものとし，彼等がどのような生活条の下でどのような生活状態にあるかという「受験生活の実態」を問うことに重点をおいた。特に，精神衛生的な見地から身体的，心理的症状を尋ねる21項目を設け，これが一つのクラスターとして“受験神経症”とでも名づけられる傾向を捉えられるようにした。この受験生活の実態の他には，彼等がいつ頃からどのような刺激で大学受験を決意したか，志望校をどのようにして選んだか等という「入試に対処する態度」，受験準備時代を人生経験としてどう評価しているか等という「受験に関連する意見」，彼等が現行の入試制度をどうみているか，そして改善するとすればどう改めてほしいかという「現行入試制

度に対する改善意見」を明らかにしようとした。これらの他に，回答内容を分析して把えるための手掛りとして回答者の条件，すなわち保護者の学歴，兄弟数などを求めることにした。

大学生と父兄に対する質問紙はそれぞれ別個に作成したが，予備校生・高校生に対する質問紙と共通の項目をできるだけ採用して相互に比較しやすいように配慮した。大学生に対しては彼等が過した受験生活の実態，父兄に対しては入試に関する意見を問うことに重点をおいた。

回答形式はどの質問紙でも特殊な項目以外は多肢選択法を採り，最もよく該当するもの一つを選ばせた。

紙数の都合で各質問紙の記載は省き（質問内容および選択肢は結果のところで判るように配慮してある）ここには質問内容の分類と項目数を表1に示しておく。

なお，各対象についての質問紙はその構成がそれぞれ異なるので，結果の表示もそれぞれ分けて行うことにする。爾後の各表において，（その1）とあるは予備校生および高校生の群（その2）は大学生群，（その3）は父兄群をそれぞれ示していることを，予め申し添えておく。

つぎに調査対象の選定であるが，予備校生・高校生については大都会の代表校若干を選べば十分であろうと判断した。問題点に述べたような現行入試制度の弊害があるものならば，それは大都会において特に強く現われていると考えられるのであって，その強く現われている程度こそわれわれが問題としなければならぬ事態で

表2　調査対象，調査実施手続および調査実施期日

対象別	調査実施校	人数 男	人数 女	人数 計	調査実施手続	調査実施期日
予備校生	近　畿（京都市）	150	7	157	研究員のインストラクションによる一齊記入	1956年1月～2月
	平　安（京都市）	115	8	123		
	京　都（京都市）	126	10	136		
	計	391	25	416		
高校生	洛北高　2年生（京都市・公立）	101	34	135	研究員のインストラクションによる一齊記入	1956年1月～2月
	洛北高　3年生（京都市・公立）	170	44	214		
	鴨沂高　3年生（京都市・公立）	49	12	61		
	計	320	90	410		
大学生	東北大学　1年生（仙台市・国立）			153	調査実施を依頼，先方の教官のインストラクションによる一齊記入	1956年1月～3月
	東北大学　2年生（仙台市・国立）			133		
	広島大学　1年生（広島市・国立）			316		
	広島大学　2年生（広島市・国立）			277		
	京都大学　1年生（京都市・国立）	768	31	799	研究員のインストラクションによる一齊記入	
	京都大学　2年生（京都市・国立）	557	25	582		
	計			2260		
父兄	洛陽高（京都市・公立）	25	5	30	学校当局に受験生全部の父兄をチェックして貰い質問紙を郵送した 502名に発送し回収率は50.8%であったが記入不全のものを除いて集計の対象とされたのが248名であった	1957年2月～3月
	堀川高（京都市・公立）	30	18	48		
	洛東高（京都市・公立）	13	12	25		
	紫野高（京都市・公立）	45	9	54		
	立命館高（京都市・私立）	53	8	61		
	綾部高（京都府下・公立）	28	2	30		
	計	194	54	248		

あるからである。大学生については入試の競争率がかなり高く，そして入学者の出身校がかなり広範囲に亙つているような大学を選ぶことにした。父兄については，調査の主眼が入試制度改革の参考意見を求めることにあるから，受験生をもつ父兄の意見として偏らない結果を得るためにはその子弟の通学する高校の性格が公立，私立，大都会，中都市などと多様である方が望ましいであろう。

このような基準に従って，**表2** に示したような対象が選定されたのであるが，厳密なサンプリングによったものではなく便宜的なものがかなり含まれている。しかし，質問事項と回答者との性格から考えて厳密なサンプリングによる場合にも結果に大きい差は出ないであろうと予想されるし，実際にも集計された各校別の結果は各項目とも殆んど全く同じ傾向を示していたのであって，今回の調査結果の適用は必ずしも狭い範囲に限定しなければならぬことはないであろうと考える。

調査実施の手続きと実施期日は**表2** に示したとおりである。実施期日は入試が迫り受験生の緊張が最も高まっていると思われる時期をねらったものである。

6. 3. 結果の考察

前節にのべたように我々の調査は入試の難関を控えている高校生，予備校生，この難関を突破して大学入学を果した大学生および受験日を間近にした子弟をもつ父兄に対して行われた。調査結果の詳述はかえって理解を妨害することになるので，まず質問項目の共通なものについて各群の比較対照を明かにしながら概括的な考察を進め次に独自の問題点に論及したい。

6.3.1. 入試受験に対處する態度 おびただしい大学進学希望者が存在することが我国だけの特殊現象であり，それがどのような条件によってかくなっているのかという分析はそれぞれ別の章でのべられている。

これらの受験生達は，どのような刺激によって大学進学を意図し，それぞれの志望校を決定するのか。またどの程度の決意をもってこれに臨んでいるのだろうか。以下受験に対する態度に関係ある数項目の質問についてその解答を検討してみよう。

進学の刺激 大学へ入学しようとする刺激は，次のうちどれから一番つよく受けたかと問い，選択肢として両親，兄弟，親類，友人先輩，書物等をあげた質問項目の回答は **表3** に示される。この数字で明かなことは大学生，高校生，予備校生の各層を通じて比率がほぼ一致していることである。大体においてこの比率が現在の青年達の進学意志への刺激の供給源の比率と推定してよろしいように思われる。最も多いのが約30%に及ぶ友人先輩の若い層からであるが，青年の心理として当然のこととして首肯され

表3 大学へ入学しようとする刺激は次のうちどれから一番強く受けましたか

（その1）

対象＼選択肢	両親	兄弟	親類	友人・先輩	先生	書物	無記入	計
予備校生	95 (22.8)	44 (10.6)	20 (4.8)	126 (30.3)	29 (7.0)	63 (15.1)	39 (9.4)	416
高校生	129 (31.5)	45 (11.0)	24 (5.9)	120 (29.3)	13 (3.2)	36 (8.8)	43 (10.5)	410
合計	224 (27.1)	89 (10.8)	44 (5.3)	246 (29.8)	42 (5.1)	99 (12.0)	82 (9.9)	826

（その2）

大学生	551 (24.4)	241 (10.7)	45 (2.0)	745 (33.0)	196 (8.8)	342 (15.1)	140 (6.2)	2260

る。やや下つて両親であり，兄弟と書物は10％内外とみられる。このうち書物というのは人からの影響よりも自分の自発的意志決定の表現の意味として見ることも可能であろう。この質問項目は特に最も影響をうけた人だけを選択させる方式をとっているので，教師の占める比率が極めて小さくなっている。従ってこのデータは高校における進学指導の缺点をそのまま現わしているのではないが，それにしても教師の影響力の極めて小さいことが問題となるであろう。このことは高校で調査されている生徒の生活実態調査等にも現われている。すなわち生徒が先生と親しく進学に関する相談をするという事例が極めて少ないようである。にもかかわらず生徒の先生に対する希望の中にはこのような問題について先生に相談にのってほしいという希望の比率が案外高いのは，高校における補導について今後考慮すべき問題の一つであろう。

大学への進学決意の時期　いつ頃から大学へ入学する心構えができたかという質問項目に対する回答は**表4**のように配分されている。約1/4の人数が高校入学以前にそのつもりになっていたと回想しているが多くは高校在学中に，そして特に2年次と3年次にその心構えができたと回答しているものが多い。この項目でも大学生と高校生予備校生との間に顕著の差が見られないことから決意の時期のはやいおそいはかならずしも入試成績に影響はないと思われる。

表4　いつ頃から大学へ入学する心がまえが実際に出てきましたか

（その1）

対象＼選択肢	小学校時代	中学校時代	高校1年	高校2年	高校3年	高校卒業後	無記入	計
予備校生	26 (6.2)	62 (14.9)	73 (17.5)	122 (29.3)	111 (26.7)	10 (2.4)	12 (2.9)	416
高校生	63 (15.3)	80 (19.5)	65 (15.8)	84 (20.4)	100 (24.4)	0 (0.0)	18 (4.4)	410
合計	89 (10.8)	142 (17.2)	138 (16.7)	206 (24.9)	211 (25.5)	10 (1.2)	30 (3.6)	826

（その2）

大学生	192 (8.5)	350 (15.5)	420 (18.6)	625 (27.7)	609 (26.9)	42 (1.9)	22 (1.0)	2260

志望校を決定した理由　志望校を決定する理由としてあなたはどのような点を考慮しましたかという質問項目で，場合によっては選択肢を2個以上選んでもよいとした。その結果は**表5**に示される。この質問に対する選択肢は各対象群ごとに多少ちがっているので直接に数字を比較するのは誤りであるが，この間に多少の喰ちがいが見られるのは注目すべき現象である。高校生・予備校生においては就職を考えて決定するとの回答が多く，より年の若い高校生程この主張が多いのであるが，大学生および父兄ではその比率はさして多くない。これに反し父兄では子供が希望するからというのが最も大きな比率を示しているのが対照的である。また大学生ではこの方面の研究や仕事を本当にしたかったと答えるものが多い。志望校選択の理由を特に概念化した形で選ばせると以上のような結果になるが，おそらく実際は理由はぬきにしてともかく入りたい学校として漠然と意識されているのであろう。これを深く追求してその動機研究を行うのには，この程度の質問紙法では不充分であるので，大まかに問題点を指摘しただけに止めておく。

志望校をきめる場合の方法は父兄について調査した所では，親子間の相談による場合と子供が自分できめてしまう場合とがほぼ同じ割合になっている。(**表6**)なお第一志望校は公立(国立)であるのが普通のようである。(**表7**)

表5　志望校をきめた理由として，あなたはどたような点を考慮されましたか

（その1）

選択肢＼対象	就職を考えて	評判がよいから	先輩らの奨め	学資が安いから	よい教授がいるから	交通が便利だから	親の希望					無記人	計
予備校生	112 (22.9) 〔26.9〕	39 (8.0) 〔9.4〕	32 (6.5) 〔7.7〕	64 (13.1) 〔15.4〕	143 (21.2) 〔34.4〕	16 (3.3) 〔3.8〕	32 (6.5) 〔7.7〕					51 (10.4) 〔12.3〕	489/416人
高校生	165 (30.0) 〔40.2〕	39 (7.1) 〔9.5〕	21 (3.8) 〔5.1〕	55 (10.0) 〔13.4〕	82 (14.9) 〔20.0〕	54 (9.8) 〔13.2〕	48 (8.7) 〔11.7〕					86 (15.6) 〔21.0〕	550/410人
合計	277 (26.7) 〔33.5〕	78 (7.5) 〔9.4〕	53 (5.1) 〔6.4〕	119 (11.5) 〔14.4〕	225 (21.7) 〔27.2〕	70 (6.7) 〔8.5〕	80 (7.7) 〔9.7〕					137 (13.2) 〔16.6〕	1039/826人

（その2）

選択肢＼対象	就職に有利だから	有名校だから	先輩らの奨め		特に指導をうけたい教授がいるから			この方面の研究や仕事を本当にしたかったから		他に行く所もないて，また行けなかったから	別に深い理由もなく	無記入	計
大学生	192 (8.5)	133 (5.8)	177 (7.8)		52 (2.3)			928 (41.1)		255 (11.3)	481 (21.3)	42 (1.6)	2260

（その3）

選択肢＼対象	就職を考えて			学資が安いから	よい教授がいるから	交通が便利だから		子供が希望するから	子供の能力にあっているから			無記入	計
父兄	28 (11.3)			15 (5.9)	19 (7.8)	5 (2.1)		109 (43.8)	69 (27.9)			3 (1.2)	248

（　）は回答総数に対する%，　〔　〕は応答者数に対する%

表6　御子弟の志望校はどのようにして定められましたか

（その3）

対象＼選択肢	父兄がまず考えてそれを子供にすすめた	親子が相談して定めた	子供が自分の考えで定めた	無記入	計
父兄	8 (3.2)	121 (48.8)	115 (46.3)	4 (1.6)	248

表7　あなたの第一志望校は公立ですか　私立ですか

（その1）

対象＼選択肢	公立	私立	無記入	計
予備校	355 (85.3)	27 (6.5)	34 (8.2)	416
高校	317 (77.3)	60 (14.6)	33 (8.0)	410
合計	672 (81.3)	87 (10.5)	67 (8.1)	826

第一志望校と自分の希望との合致度　さてこのようにしてきまった第一志望の学校は希望と完全に一致しているかどうか。受験生では3割前後がこれを肯定しているが，父兄では2割程度に過ぎない。しかし双方共大体希望に合致するというカテゴリーに回答が集中し，希望に合わない学校を止むなく第一志望校としているのは10%前後に過ぎない。（表8）

表8　第一志望校はあなたの希望と合致していますか

（その1）

対象＼選択肢	全く合致	大体合致	余り合致せず	全く合致せず	無記入	計
予備校生	142 (34.1)	220 (52.8)	31 (7.4)	4 (1.0)	19 (4.5)	416
高校生	117 (28.5)	210 (51.2)	39 (9.5)	2 (0.5)	42 (10.2)	410
合計	259 (31.3)	430 (52.0)	70 (8.5)	6 (0.7)	61 (7.4)	826

（その3）

父兄	49 (19.8)	169 (68.1)	21 (8.5)	7 (2.8)	2 (0.8)	248

これと既に入学した大学生が現状に満足しているかどうかを示す表9と対照して見ると，大学生にわずか乍ら不満足の程度が高いようである。これは第一志望校へ入りにくかったり，止むを得ずして希望と合致しない第一志望校へ入ってしまった学生の多いのを意味するのか，あるいは入学して見て幻滅を感ずるものが出るのかいずれとも断定しがたい。

表9　あなたはいま在学している大学や学部に満足していますか

（その2）

対象＼選択肢	満足している	やや満足している	不満足である	できたらかわりたい	別に何とも感じていない	無記入	計
大学生	766 (33.9)	736 (32.6)	277 (12.3)	215 (9.5)	251 (11.1)	15 (0.7)	2260

いずれにせよ，標本校は一応有名校としての水準にあることから，2割程度が不満足を表明したり，あるいは出来たら転学（部）を希望していることは，学生補導上考慮すべき事柄であろう。恐らく極めて少数の大学を除いては入学しても不満足である学生の数はおびただしいものと思われる。多くの大学がありながら，彼等の希望に合致する大学の範囲がせばめられている現状は何とか是正されねばなるまい。

不合格の場合の身のふり方について　もしこんど希望する大学の試験に不合格だったらどうするかという質問に対し，再受験する，併願している他大学へ行く（行かせる），進学断念に回答が分布するが，高校生，予備校生，父兄の三群の間に多少のちがいが見られる。すなわち予備校生はすでに再受験の身であるため高校生に比して，第一のカテゴリーへの反応が少ないのは当然として，どこへでも入れる所へという気分が非常に多くなっている。そして附録（6.5.）においてくわしくのべるが，このカテゴリーに反応するものと然らざるものを比較すると，前者は神経症的傾向の多いことから，予備校生の受験に対する緊張状態がより高いことをも意味している。父兄の反応は丁度高校生と予備校生の中間をとっているが，進学を断念させたい気持は，当事者達よりもやや上廻っているのではなかろうか。(表10)

表10　もしこんど希望する大学の試験に不合格だつたらどうしますか

（その1）

対象＼選択肢	翌年やり直す	翌翌年やり直す	望んでいない大学でも合格できたらそこへ行く	進学を断念して就職する	無記入	計
予備校生	144 (34.6)	5 (1.2)	188 (45.2)	45 (10.8)	34 (8.1)	416
高校生	244 (59.5)	10 (2.4)	71 (17.3)	54 (13.1)	31 (7.5)	410
合計	388 (46.9)	15 (1.8)	259 (31.3)	99 (12.0)	65 (7.8)	826

（その3）

対象＼選択肢	翌年やり直させる		望んでいない大学でも合格できたら行かせる	進学を断念して就職させる	無記入	計
父兄	126 (50.8)		64 (25.8)	47 (18.9)	11 (4.5)	248

受験を断念しないと答えたもののうちあと何回くらい受験をしようと思っているかは表11のとおりであるが，表10と対照すると，ここで答えられた回数は，必ずしも年数を意味するものではないことがわかる。当事者はあと3回位，父兄はあと2回位までの範囲に大部分の反応が集っている。

表11　こんど不合格でも受験を断念しないという方はその後何回くらい受験しよう（受験させてもよい）と思いますか

（その1）

対象＼階級	1回	2回	3回	4～7回	合格するまで	無記入	計
予備校生	72 (21.4)	128 (38.0)	91 (27.0)	18 (5.3)	6 (1.8)	22 (6.5)	337
高校生	100 (30.8)	129 (39.7)	53 (16.3)	9 (2.8)	32 (9.8)	2 (0.6)	325
合計	172 (26.0)	257 (38.8)	144 (21.8)	27 (4.1)	33 (5.7)	24 (3.6)	662

（その3）

父　　兄	54 (42.9)	61 (48.4)	7 (5.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (3.2)	126

受験を断念すると答えたものの理由は，当事者たちは経済的に余裕がないと答えるのが父兄よりも多いことは，さきにのべた志望校決定の理由として就職有利を父兄よりも鼓張しているのと軌を一にしていると思われる。(表12)

表12　「受験を断念して就職する（させる）」という理由は何ですか

（その1）

対象＼選択肢	経済的に余裕がない	他の道で身分を生かしたい	自分の能力にあきらめて	家族の反対があるので	その他	計
予備校生	35 (38.5) 〔77.8〕	26 (28.6) 〔57.8〕	10 (11.0) 〔22.2〕	3 (3.3) 〔6.7〕	17 (18.7) 〔37.8〕	91/45
高校生	29 (31.9) 〔53.7〕	21 (23.1) 〔38.9〕	29 (31.9) 〔53.7〕	4 (4.4) 〔7.4〕	8 (8.8) 〔14.8〕	91/54
合計	64 (35.2) 〔64.6〕	47 (25.8) 〔47.5〕	39 (21.4) 〔39.4〕	7 (3.8) 〔7.1〕	25 (13.7) 〔25.3〕	182/99

（その3）

対象＼選択肢	経済的に余裕がない	他の道で子供を生かしたい			その他	計
父　　兄	12 (24.5)	33 (71.3)			2 (4.3)	47

（　）は回答総数に対する%，〔　〕は応答者数に対する%

6.3.2.受験生活の実態　当初にのべたように，極めて激烈な入学試験競争を経なければ，大学に進学することが出来ないというわが国では，当然受験生の生活が歪んだものになっているのではないかと想像される。世上では受験時代の生活の諸相が断片的に報道されている。曰く四当五落，これは選挙の軍資金 800万以上なければ当選できないとした八当七落をもじったもので，睡眠を4時間にして頑張るものは合格，5時間もねむる奴は不合格だぞという意味である。また勉強時間等も常識を外れる時間数が伝えられて居り，従って娯楽の時間等はとるいとまもなく，正しく灰色の人生といわれている。神経症のごとき精神衛生上の問題も，特に受験生活に結付けられて居り，時には自殺等の事例等を報ぜられている。

われわれの調査ではこの生活に深くメスを入れて堀下げる前に，ひろく受験生全般の生活の基礎的な条件について資料を求めようとした。以下，数表に従ってのべてみる。

予備校の調査対象は京都市内の有名予備校3校であるが，表13に示されるように，自宅よりの通学者よりも下宿からの通学者がやや多くなっている。厳格に小学区制を実施している高校生の比率と比較すると予備校生の半数は地方出身のものと推定される。

表13　あなたが現在住んでいるところは自宅ですか　下宿ですか

（その1）

対象＼選択肢	自宅	下宿	無記入	計
予備校生	184 (44.2)	218 (52.4)	14 (3.4)	416
高校生	378 (92.2)	23 (5.6)	9 (2.2)	410
合計	562 (68.0)	241 (29.2)	23 (2.8)	826

勉強時間 予備校生の授業時間は高校生と同じ4～5時間を中心にして前後に拡りをもっている（表14，表15）。これに加えて家庭（下宿）における勉強時間を考えると勉強時間の合計が12～13時間に及ぶものが少くないことが推定される。

表14 あなたは一日に何時間くらい授業をうけますか

（その1）

対象＼階級	0～1時	2～3時	4～5時	6～7時	無記入	計
予備校生	34 (8.2)	78 (18.7)	169 (40.6)	99 (23.8)	36 (8.7)	416
高校生	0 (0.0)	0 (0.0)	410 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	410
合計	34 (4.1)	78 (9.4)	579 (70.2)	99 (11.9)	36 (4.4)	826

表15 あなたの家庭における勉強時間は一日に何時間くらいですか

（その1）

対象＼階級	1～2時間	3～4時間	5～6時間	7～8時間	9～10時間	11時間～	無記入	計
予備校生	7 (1.7)	56 (13.4)	118 (28.3)	124 (29.8)	56 (13.4)	34 (8.2)	21 (5.0)	416
高校生	36 (8.8)	74 (18.0)	76 (18.5)	57 (13.9)	43 (10.5)	30 (7.3)	94 (22.9)	410
合計	43 (5.2)	130 (15.7)	194 (23.5)	181 (21.9)	99 (12.0)	64 (7.7)	115 (13.9)	826

参考書 以上の長時間にわたって，それぞれ受験科目について勉強しているのであるが，参考書は各科目毎に何冊くらい使用しているだろうか。表16をみると，平均3冊というのが予備校・高校共に最多頻数をしめている。これに対して合格者群である大学生グループでの最多頻数は，2冊になっていて前者との差異が見られる。この資料だけから断定はできないが，あるいは受験勉強において余り多くの参考書を買いこむのは，かえって能率を阻害するもので，その限度は2冊くらいであることを意味しているのかも知れない。

表16 おのおのの受験科目について参考書は平均何冊くらい例用していますか

（その1）

対象＼選択肢	教科書だけ	1冊	2冊	3冊	4冊以上	無記入	計
予備校生	7 (1.7)	45 (10.8)	148 (35.6)	186 (44.7)	19 (4.5)	11 (2.6)	416
高校生	23 (5.6)	12 (2.9)	66 (16.1)	223 (54.4)	44 (10.7)	42 (10.2)	410
合計	30 (3.6)	57 (6.9)	214 (25.9)	409 (49.5)	63 (7.6)	53 (6.4)	826

（その2）

大学生	69 (3.0)	650 (28.7)	998 (44.1)	373 (16.5)	162 (7.2)	8 (0.4)	2260

日課 予備校生高校生を通じて日課をきめて大体実行しているものが平均4割であるが，予備校生の方がやや多いもののようである。(表17)

この日課のうちで睡眠時間について充分であるか不足しているかを，本人の主観によって判断させて見ると，予備校生の約6割，高校生の7割以上が充分と答えている。この両者に若干の差はみられるが，前述の4当5落は，受験生の全般についていえることではないことがわかる。(表18)

表17　あなたは目課を決めていますか

（その1）

対象＼選択肢	決めていない	決めていて，大体実行している	決めているが守れない	無記入	計
予備校生	98 (23.6)	188 (45.2)	114 (27.4)	16 (3.8)	416
高校生	127 (30.9)	155 (37.8)	117 (28.5)	11 (2.7)	410
合計	225 (27.2)	343 (41.5)	231 (27.9)	27 (3.3)	826

表18　あなたの睡眠時間は充分ですか　不足していますか

（その1）

対象＼選択肢	充分	不足	無記入	計
予備校生	247 (59.4)	155 (37.3)	14 (3.4)	416
高校生	314 (76.7)	80 (19.5)	16 (3.9)	410
合計	561 (67.9)	235 (28.4)	30 (3.6)	826

なお就寝時および起床時の調査では，就寝時は午前0時半，起床時は午前8時が最多頻数をしめていて，それぞれ±4時間のひろがりをもっているが，平均睡眠時間は高校生で7時間50分，予備校生で6時間40分となっている。相当長期にわたって行われる受験準備は，生理的限界を越えてはなり立たないことが知られるであろう。受験準備中の特定の短い期間には，世上伝えられるような無理な勉強も行われることがあっても，一般的には必要程度の睡眠はとっていると推察される。（表19，表20，表21）

表19　就寝時刻

（その1）

対象＼時刻	10時まで	10時	11時	12時	1時	2時	3時	4時	4時以後	無記入	計
予備校生	9 (2.2)	4 (1.0)	22 (5.3)	54 (13.0)	109 (26.2)	104 (25.0)	68 (16.3)	28 (6.7)	6 (1.4)	12 (2.9)	416
高校生	20 (4.9)	5 (1.2)	32 (7.8)	71 (17.3)	113 (27.6)	63 (15.4)	46 (11.2)	21 (5.1)	16 (3.9)	23 (5.6)	410
合計	29 (3.5)	9 (1.1)	54 (6.5)	125 (15.1)	222 (26.9)	167 (20.2)	114 (13.8)	49 (5.9)	22 (2.7)	35 (4.2)	826

表20　起床時刻

（その1）

対象＼時刻	5時まで	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	11時以後	無記入	計
予備校生	1 (0.2)	7 (1.7)	13 (3.1)	45 (10.8)	162 (38.9)	142 (34.1)	18 (4.3)	12 (2.9)	4 (1.0)	12 (2.9)	416
高校生	5 (1.2)	7 (1.7)	5 (1.2)	19 (4.6)	114 (27.8)	146 (35.6)	41 (10.0)	32 (7.8)	18 (4.4)	23 (5.6)	410
合計	6 (0.7)	14 (1.7)	18 (2.2)	64 (7.7)	276 (33.4)	288 (34.8)	59 (7.1)	44 (5.3)	22 (2.7)	35 (4.2)	826

表21　平均睡眠時間

（その1）

対象＼時刻	平均就寝時刻	平均起床時刻	平均睡眠時間
予備校生	1時10分	7時50分	6時間40分
高校生	12時40分	8時30分	7時間50分
全	1時0分	8時10分	7時間10分

受験準備時代の心の支え　受験準備時代（予備校生・高校生にとっては現在であり大学生では過去の追想）に一番心の支えになっているものを，5個の選択肢によって選ばせた結果は表22である。予備校生高校生を通じての平均値と大学生のそれとは，極めて類似し，入学への一途の希望と未来への夢という，表現は異るが彼等自身の強い意欲に支えられていると答えられている。約15%が家族・友人・先輩の励ましや必尽しが，心の支えであると答えている。予備校生と高校生とを比較すると選択肢の選び方に相当の相違があり，高校生では心の支えは未来への夢という漠然とした形をとることが多いのに反し，予備校生では切実に入学という一途の希望に集中してくる。これは落第を体験して，追いつめられた気持になるものの多いのを意味しているのであろう。なおここでも留意すべきは高校教師の指導・助言があまり彼等の心の支えになっていないのは6.3.1.でのべた進学への意志決定に，教師の影響の少いことと併せて高校における教師生徒の人間関係に考慮する余地があるように思われる。

表22　現在（受験準備時代に）一番あなたの心の支えになつている（なつた）ものは何ですか

（その1）

対象＼選択肢	入学という一途の希望	家旅・友人先輩の励しや心尽し	先生の指導と助言	未来への夢	宗教的信仰	その他	無記入	計
予備校生	188 (45.2)	59 (14.2)	4 (0.9)	139 (33.4)	3 (0.7)	15 (3.6)	8 (1.9)	416
高校生	85 (20.7)	83 (20.2)	4 (0.9)	173 (42.2)	13 (3.2)	21 (5.1)	31 (7.5)	410
合計	273 (33.0)	142 (17.2)	8 (0.9)	312 (37.8)	16 (1.9)	36 (4.3)	39 (4.7)	826

（その2）

大学生	849 (37.6)	344 (15.2)	58 (2.6)	873 (38.6)	32 (1.4)		104 (4.6)	2260

精神衛生　表23は大学生について受験準備が原因と思われる病気を経験した比率を示しているが，重症4%，軽い病気17%で格別多いとは思われない。また神経衰弱についても，重症が2.7%でむしろ少い比率と考えられる。軽度の神経衰弱というのは，自己判定として果してどの程度のことを意味しているかは明かでないが，一般にこの種の症状は，過大に報告されがちなものであるので，専門家が診て重症とするものは含まれてないと考えられる。従って，軽い神経衰弱と自己判定をするのは，多くは神経質症状の若干を経験したという程度にとどまるのであろう。（表24）ともあれ重症・軽症を含めて自覚症状を経験した641名に，神経衰弱の原因と思わるものを選択させて見た結果は表25である。この選択肢は専門的にいって原因ではなく症状であるようなものも含まれているが，自信喪失と競争の重圧感を指摘するものが多かった。

表23　受験準備時代またはその後にあなたは受験準備が原因と思われる病気になりましたか

（その2）

対象＼選択肢	重い病気になった	軽い病気になった	病気にならなかった	無記入	計
大学生	91 (4.0)	388 (17.2)	1765 (78.1)	16 (0.7)	2260

表24　受験準備時代にあなたは神経衰弱になつたことがありますか

（その2）

対象＼選択肢	重いのになった	軽いのになった	そんなことはなかった	無記入	計
大学生	61 (2.7)	580 (25.7)	1597 (70.7)	22 (1.0)	2260

表25　神経衰弱になつたことのある人はその原因は何だと自分では思つていますか

（その2）

対象＼選択肢	過度の勉強	自信がなくなった	競争の重圧感	嫌いな科目を勉強せねばならず好きなことが出来ない	無記入	計
大学生	97 (15.1)	203 (31.7)	183 (28.5)	133 (20.7)	25 (3.9)	641

大学生の追想を通じて，受験時代に3割程が神経症傾向を経験しているが，これは合格者群についてである。現在受験準備中の予備校生および高校生に対し，21項目からなるテストを実施して見た結果は，附録6.5.において詳細にのべることにする。

6.3.3. **受験に関する意見**　受験準備時代は人間全体としての成長にとって，どのように影響すると思うかという質問項目に対し，プラスになる，プラスにもマイナスにもなる，マイナスになるの3カテゴリーを選択肢とした反応は表26のごとくである。父兄と大学生は現在その生活を行っている当事者でないので，幾分客観的な態度で判断していると思われるが，この両者の回答は極めて類似している。すなわち約半数がプラスにもマイナスにもなると答え，残りがプラスとマイナスに分れるが約，10％がマイナス，その3倍強がプラスと答えている。これと比較して高校生の回答を見るとマイナスになると答えるものがやや多くなって居り，予備校生はプラスになると答えるものが半数を占め，マイナスになると答えるものの5倍強に当っている。

いわゆる灰色の生活を送っているその当事者るであ予備校生がもっとも多くこの生活が人生のプラスであると考え，まだ失敗の経験を持た

表26　受験準備時代は人間全体としての成長にとつてどのように影響すると思いますか

（その1）

対象＼選択肢	プラスになる	プラスにもマイナスにも	マイナスになる	無記入	計
予備校生	201 (48.3)	168 (40.4)	38 (9.1)	9 (2.1)	416
高校生	143 (34.9)	191 (46.6)	67 (16.3)	9 (2.2)	410
合計	344 (41.6)	359 (43.4)	105 (12.7)	18 (2.2)	826

（その2）

大学生	779 (34.5)	1218 (53.9)	237 (10.5)	26 (1.2)	2260

（その3）

父兄	91 (36.7)	126 (50.8)	28 (11.3)	3 (1.2)	248

ない高校生にマイナスであるとの答えが多いのは，注目すべき現象であろう。プラスであると考えるからこそ，敢て予備校生活を行っているのだという解釈もあろうが，また当面している苦しい生活をプラスになるのだとして合理化する心理であるとも解され。

ともあれわれわれが問題視している入学難に備えた歪んだ生活のあり方も，当事者およびその父兄およびかって当事者であった大学生の全般の僅か1割前後を除いては，止むを得ない事情として是認しているのではないかと想像される。交通難や物資の入手難に耐えると同じ意味でわが国民の順応性の一面として指摘しておきたい。

さてプラスあるいはマイナスと考えるかは，表27および表28に示される。父兄の場合は単一のカテゴリーを選ばせ，他は2以上を選んでいる場合もあるので直接の比較は出来ないが，当事者たちは忍耐力という性格形成をプラスの筆頭にあげ，親達は自主的に勉強することを覚え

表27　受験準備時代が人間成長にとつてプラスになると考える人はどんな点でそう思いますか

（その1）

対象＼選択肢	忍耐力ができる	学習した教科全体の見通しをうる	勤勉な習慣をうる	自主的に勉強することを覚える	その他	計
予備校生	129 (42.9) 〔64.2〕	22 (7.3) 〔10.9〕	56 (18.6) 〔27.9〕	60 (19.9) 〔29.9〕	34 (11.3) 〔16.9〕	301/201人
高校生	122 (42.7) 〔85.3〕	28 (9.8) 〔19.6〕	41 (14.3) 〔28.7〕	76 (26.6) 〔53.1〕	19 (6.6) 〔13.3〕	286/143人
合計	251 (42.8) 〔73.0〕	50 (8.5) 〔14.5〕	97 (16.5) 〔28.2〕	136 (23.2) 〔39.5〕	53 (9.0) 〔15.4〕	587/344人

（その2）

大学生	546 (36.5) 〔70.1〕	331 (22.1) 〔42.5〕	127 (8.5) 〔16.3〕	409 (27.4) 〔52.5〕	82 (5.5) 〔10.5〕	1495/779人

（その3）

父兄	18 (20.4)	20 (21.5)	12 (12.9)	39 (42.9)	2 (2.2)	91/91人

（　）は回答総数に対する%，〔　〕は応答者数に対する%

表28　受験準備時代が人間成長にとつてマイナスになると考える人はどんな点でそう思いますか

（その1）

対象＼選択肢	生活が寂しく落着かない	体を弱くする	馬車馬のように勉強するため視野を狭める	利己的になり他人とのつきあいが悪くなる	その他	計
予備校生	28 (22.4) 〔73.7〕	28 (22.4) 〔73.7〕	27 (21.6) 〔71.1〕	30 (24.0) 〔78.9〕	12 (9.6) 〔31.6〕	125/38人
高校生	47 (24.9) 〔70.1〕	37 (19.6) 〔55.2〕	38 (20.1) 〔56.7〕	58 (30.7) 〔86.6〕	9 (4.8) 〔13.4〕	189/67人
合計	75 (23.9) 〔71.4〕	65 (20.7) 〔61.9〕	65 (20.7) 〔61.9〕	88 (28.0) 〔83.8〕	21 (6.7) 〔20.0〕	314/105人

（その2）

大学生	156 (28.9) 〔65.8〕	115 (21.3) 〔48.5〕	116 (21.5) 〔48.9〕	110 (20.4) 〔46.4〕	43 (8.0) 〔18.1〕	540/237人

（その3）

対象＼選択肢	生活が冷たく可哀そうだ	体を弱くする	視野が狭くなる	利己的になり他人とのつきあいが悪くなる	その他	無記入	計
父　　兄	5 (17.9)	6 (21.4)	5 (17.9)	5 (17.9)	1(3.6)	6(21.4)	28

（　）は回答総数に対する%，〔　〕は応答者数に対する%

るという生活指導上の利点をあげている。

マイナスと答えたものの理由は，生活がさびしいという主観面，身体的健康面，視野を狭めるという教養面，利己的になり非社交的になるという社会性の面を意味する4のカテゴリーに，ほぼ均等に配分される。僅かな差異をみると大学生が回想して生活の寂しさをやや強調し，高校生が利己的になり交際が悪くなるのに幾分偏よる傾向があるが，統計的には有意ではない。

大学進学に際し特定校に志願者が殺到するのは7．**入学競争の社会的条件**で分析されるような多くの理由が考えられるが，よい大学に入らねばならぬとする傾向と，父兄に問うた学歴と実力の軽重について，**表29**について検討して見よう。学歴が絶対にものをいう，実力が絶対にものをいうという一辺倒の考え方は少数であって，特に前者は数えるに足りない。折衷的意見

表29　学歴と実力とについてどう思われますか

（その3）

対象＼選択肢	学歴が絶対にものをいう	実力も大切だが学歴の方がより大切だ	学歴も大切だが実力の方がより大切だ	実力が絶対にものをいう	無記入	計
父　　兄	9 (3.6)	47 (18.9)	152 (61.3)	27 (10.9)	13 (5.2)	248

では，実力の方をより大切とするものがその反対の約3倍で，全体の過半数をしめている。この良識は先にのべた子弟の第一志望校決定の際に，就職の好条件と考えてきめたという回答が，僅か11%であることと符合する。すなわち日本の現状では，特定の優秀校の学歴をもっているものがより多く出世している実状は知っているが，それが直に特定の優秀校でなければうだつが上らないという極端な考え方が，大勢を支配しているとは思われない。一方受験生がいろいろの理由，特に就職を考えてなどといって，特定校への入学を切望するのは，むしろ表面的の理由であり，実際は彼等仲間の間に醸成されている雰囲気に支配され有名校にひしめくというのが，最もふさわしい表現ではなかろうか。これに対して親達は子供が希望するからその選択を承認し，教師はほとんどこれに関与していないのが実状のように思われる。

6.3.4.現行入試制度の改善意見　もしわが国の現在の試験地獄が何等かの弊害を伴うものであるとしたら，それを改善して弊害の除去につとめねばならぬ。われわれの研究はこの目標への手段として，現状分析を行っている段階にある。

現行の入試制度の根本的改革は，目下の段階では机上論であって，将来，教育制度全般との関連のもとに最も合理的な方法が樹立され，而してそれが与論の支持を受けてはじめて実行可能になる。われわれのささやかな調査結果を通じて言えることは，当事者および父兄の大部分が現状止むを得ないという態度で，この制度に適応しようとしているように思われる。**表30**というのは現行制度の弊害は当事者たちには単に難しさ苦しさという体験として現われるだけであって，専門家や有識者が憂えている諸点，つまり，(1)国家の将来を荷うべき多数の青年が，自ら狭く限定してしまった特定校への入学を阻まれ

表30　現在の入学試験の方法についてあなたはどんなに考えていますか

（その1）

対象＼選択肢	公正な選抜方法だと思う	大体公正な選抜方法だと思う	余り公正な選抜方法とはいえないと思う	全く不公平なものだと思う	分らない	無記入	計
予備校生	49 (11.7)	195 (46.9)	107 (25.7)	15 (3.6)	35 (8.4)	15 (3.6)	416
高校	64 (15.6)	180 (43.9)	85 (20.7)	22 (5.4)	43 (10.5)	16 (3.9)	410
合計	113 (13.7)	375 (45.4)	192 (23.2)	37 (4.5)	78 (9.4)	31 (3.7)	826

（その2）

大学生	438 (19.4)	1277 (56.5)	311 (13.8)	68 (3.0)	124 (5.5)	42 (1.8)	2260

たということだけで，長いときには，数年間も入試合格のみを目的とする浪人生活を送っていることの無駄，(2)折角多くの大学をつくりながら，特定校のみに志願者が殺到し，従来の官学偏重や，学閥意識の傾向との悪循環をたち切れないでいること，(3)またこの制度が当事者である青年たちに好ましからぬ考え方を強い，人生観や世界観の形成に悪影響を齎すということ等は，それが日常生活の当然の事実としてそれには順応し，知らず知らずのうちに個個人の人格形成に参与しているのであるから，当事者たちに自覚されないのは当然であろう。この点に関しては，世界各国におけるこの問題の実状を紹介し，またわが国における歴史的因果をも綿密に考察させることによって，与論を啓蒙する努力が必要と思われる。

根本的改革案は入試全廃と考えるが，これは現段階では机上論に過ぎない。そこで仮に実行するとして，教育行政機関もしくは学校当局の手で容易に実施しうる程度の改善案に対し，当事者および父兄がどのような反応を示すかを考察してみたい。選択肢として選んだ改善案の骨子は，大局的に見れば小細工な策に過ぎないが，それぞれ限定された意味をもっている。この意味を明かにしながら，受験生ならびに父兄のそれに対する反応を考察しよう。

志望校の選択について　表31 にあげた改善案のうち，(1)国立大学の試験を同一日に行って並願を許さないというのは，自分の能力に合わせて一発必中主義で選択させること，そのような志願者が一流校の落武者のために席を奪われないようにする，これがひいては学校差を小さくしてゆくものであり，大学入学後の学生の勉学態度をよくするだろうという仮定を含んでいる。これに対して，(2)国立大学は共通試験を行うというのは上位から順に希望校に配置するという意味で，適性検査の思想を含んでいる。国立大学で勉学するにふさわしい何名かを，定員全般の範囲で上位から選択するという合理性をもつ一面，大学の学校差が今より更に拡大されるおそれがある。しかし，調査にあたって，われわれはこれらの項目のもつ意味内容については被調査者に伝えずに，ただ志願の仕方という形式的な面だけを具体的に教示した。

調査の結果は表31 に示した。それによると，どの被験者層でも約3割が現行の一次・二次の方法を支持している。わからないという反応は予備校生および父兄では約1割，まだ受験の経験のない高校生では2割である。改善意見のうち一発必中方式をよしとするものが15％内外であるのに，共通試験で第3志望までを認める方式は，前者の2～3倍に及んでいる。質問項目間の内部相関を調べてみると，前者を指摘するものは理科系志願者に多く，後者を指摘するものには文科系志願者に多かった。また父母の学歴の低いものが前者を，高いものが後者を選ぶ傾向も見られた。

表31　もし入学試験制度を改善するとしたら　それぞれどのように変えるのがよいと思われますか（志望校の選択について）

（その1）

対象＼選択肢	現行のままがよい	国立大学の試験を同一日に行って一校しか志願できないようにする	国立大学は共通試験を行って少くとも第3志望までを認めるようにする	わからない	無記入	計
予備校生	125 (30.0)	61 (14.7)	170 (40.9)	47 (11.3)	13 (3.1)	416
高校生	107 (26.1)	60 (14.6)	129 (31.4)	79 (19.3)	35 (8.5)	410
合計	232 (28.1)	121 (14.6)	299 (36.2)	126 (15.2)	48 (5.8)	826

（その3）

父兄	69 (27.8)	40 (16.1)	111 (44.7)	24 (9.7)	4 (1.6)	248

試験科目について　試験科目の増減について四つの方法が考えられる。(1)は試験科目を減らし基礎科目だけにすることである。この方法のねらいは，受験勉強の負担を軽くすることを主眼とし，文科系志願者の理数科を免除するなどであるが，近来の一般教養の考えと矛盾するものがある。(2)は科目をふやして高校の全科目について行うことである。これのねらいは，入試対策のために高校の教育課程が乱されるのを防ぎ，平素の勉強を充実される効果があり，受験生の能力を巾広いものにする効果は考えられるが，いきおい受験勉強の過重負担となることも予想される。(3)は3年前まで実施されていた進適と学力考査の併用である。これは，かって，高校間の地域差学校差を多少なりともカバーしていたものである。(4)は進学適性検査だけにすることである。これのねらいは説明を要しないであろう。

表32は試験科目についての反応を示す。予備校生は現在の科目を支持し，父兄は科目をへらすことを希望している。その他の方法については，少人数しか反応していない。

表32　もし入学試験制度を改善するとしたら　それぞれどのように変えるのがよいと思われますか（試験科目について）

（その1）

対象＼選択肢	現行のままがよい	科目をへらして基礎的な学科だけにする	科目をふやして高校の全科目について行う	現在の科目のほかに進学適性検査を加える	進学適性検査だけにする	わからない	無記入	計
予備校生	187 (44.9)	121 (29.1)	35 (8.4)	32 (7.7)	11 (2.6)	20 (4.8)	10 (2.4)	416
高校生	146 (35.6)	150 (36.6)	24 (5.8)	15 (3.6)	15 (3.6)	38 (9.3)	22 (5.3)	410
合計	333 (40.3)	271 (32.8)	59 (7.1)	47 (5.7)	26 (3.1)	58 (7.0)	32 (3.9)	826

（その3）

父兄	71 (28.6)	90 (36.3)	26 (10.5)	27 (10.9)	8 (3.2)	18 (7.3)	8 (3.2)	248

選抜の方法について　**表33**にあげられた，いくつかの改善案の意味は，一つの重要な仮定を背景としている。この研究で採用した調査方法では究明することが困難であるが，日常接する事例を通じて，入学試験の合否が事実を超えて受験者に深刻な影響を与えているのではないかと憂慮される。すなわち入試失敗の経験が何等かの形で根深く作用し一種の卑屈さを形成しているのではなかろうか。

現在の大学の入学試験は資格試験ではなく選

表33　もし入学試験制度を改善するとしたら　それぞれどのように変えるのがよいと思われますか（選抜の方法について）

（その1）

対象＼選択肢	現行のままがよい	試験の結果一定水準以上を仮合格者としその中から定員だけを抽選によって入学させる	入学定員の半分或は三分の一を現行どおりに採り残りは一定水準以上の学力をもつ多数から抽選で入学させる	高校の内申だけで詮衡する	わからない	無記入	計
予備校生	260 (62.5)	49 (11.8)	30 (7.2)	3 (0.7)	50 (12.2)	23 (5.5)	416
高校生	225 (54.9)	41 (10.0)	32 (7.8)	9 (2.2)	73 (17.8)	30 (7.3)	410
合計	285 (58.7)	90 (10.9)	62 (7.5)	12 (1.4)	124(15.0)	53 (6.4)	826

（その3）

父兄	155 (62.5)	24 (9.7)	34 (13.7)	10 (4.0)	17 (6.9)	8 (3.2)	248

抜試験である。入試結果の処理は各科目の点数の合計点をもって序列を決定し，合格者と不合格者の間に文字通り一線をもって劃する作業で了っている。この一線は正に天国と地獄の境目になるのであるが，この一線を狭んでいる受験者の間に果してどのような差があるであろうか。多くの場合は，1000点満点に対する1，2点の差に過ぎない。そして点数の分布を考慮すると，末尾の合格者群とそれにつづくより多くの不合格者群との間には，学力の優劣を意味する点差があるとは信じられないのである。然るに，一線上に浮び上った合格者は，不当の優越感を抱き，一方，約束とはいい乍ら，一線で遮断された不合格者群は，単に合格できなかったという苦痛のみならず，不必要な劣等感を抱くようになる。この事情は一般には正当に認識されてはおらず，一点でも差は差であると信じられている。優秀な受験者の集中する大学では，定員以上の合格者を定めて，後は定員分だけ抽選しても格別合格者の質が悪くなるとは考えられない。そして落第のかわりに合格抽選もれということで，不合格者の精神衛生もよくなろうというのが，ここで選択肢に選ばれた改善案の主旨である。すべての被調査者層を通じて，これらの試案は受容されておらず，それぞれ1割内外の賛成者があるだけで，過半数は現行の競争試験を望んでいる。（表33）

6.4. 結　　語

以上，われわれの調査結果のうち，入試に対処する態度，受験生活の実態，受験に関連する意見，および現行入試制度に対する改善意見等について概括的に報告し，受験生活中の受験神経症傾向については，6.5. に附録として詳しく報告する。

この報告中し取上げた問題を簡単に要約すると，以下のようになる。

(1)多くの受験生および父兄は，われわれが指摘しようとする入試の弊害については，さほど大きな抵抗を示さず，大体において現状やむをえないことと観念し，あるいは当然のことと是認している傾向が見られる。われわれは，この状況がむしろ憂慮すべきことではないかと思っている。

(2)受験生の進学しようとする理由と，親の進学させようとする理由を比較すると，そこに多少の差が見られる。子は就職条件その他の理屈で説明しようとし，親は子供が希望するからとするのが多いのは，現在の日本の親子関係の一端を現わしているのではなかろうか。

(3)進学問題に関する教師の影響力が，ほとんどみられないのは，生徒指導の欠陥として指摘

されよう。

(4)水準の高い大学においても，合格者のうちその大学へ入ったことの満足感をもたない学生が20％以上もあることは問題であろう。多くの大学についていうと，適材適所主義的な安定感が学生の意識の上に著しくかけていることが予想されるが，現行の入試制度が然らしめていると考えられる。

(5)受験生ことに浪人の生活は，望ましい青年の生活の型と異った生活であることはいうまでもないが，一般に鼓張して伝えられている程の無理な生活は，僅少であると思われる。生理的限界を起す過少な睡眠や，常識をこえた長い勉強時間等は，結局，能率を低め競争から落伍する方へ導くからであろう。

(6)浪人と高校生を比較すると，その間にいくつかの相違点があげられるが，浪人において，より切迫した状態が認められる。たとえば，受験時代の心の支えとして指摘するものの中で，高校生では未来への夢という漠然とした表現をより多く選択し，予備校生で入学という一途の希望という切実な表現をより多く選択している。また神経質傾向の訴えも浪人に多くみられる。

(7)受験準備時代が人間全体としての成長にとって，プラスであるかマイナスであるかについての意見は全体としてはプラスにもマイナスにもなるとの折衷的意見が多いが，はっきりプラスであると答えるものはマイナスであると答えるものよりはるかに多い。ことに予備校生において著しい。プラスの理由として忍耐力という性格形成をとりあげ，親達は自主的な勉強という生活指導上の利点をあげている。マイナスの理由として，生活がさびしい不健康，視野を狭ばめる，非社交的という四つのカテゴリーに答えが分散している。

(8)学歴と実力の軽重に関する父兄の意見は，学歴が絶対にものをいう，実力が絶対にものをいうとする一辺倒の考え方は少数であって，とくに前者は数えるに足りない。折衷的意見のうち実力の方をより大切とするものが，その反対の約3倍で全体の過半数をしめている。この良識は志望校決定動機に関する回答とも符合する。この点から特定校集中の傾向を助長するのは親の意見ではなく，生徒自身の中にあるものとみるべきであろう。

(9)現行の入試制度については，概して順応的であり，国立大学の志願方式に関して改正を希望しているものが多いが，試験科目・選抜方法等に関しては，むしろ現行のものを公平として存続を希望している。

6.5. （附）受験神経症傾向の分析

6.5.1. 受験神経症インヴェントリー すでにのべたように，予備校生徒および高校生徒の受験生活に対する適応態勢をみるために，一連の調査を行ったが，その中の21問は，特に受験生活によって起る受験症傾向をみるためのものであった。この21問の分析を行うにあたっては，各問題をひとつずつバラバラに分析するよりも，これを全体として受験神経症傾向に対する一つのインヴェントリーとみなし，これを他の項目との関係において分析した方が適当と考えた。つぎにその項目をかかげる，

1 あなたの現在の健康状態はどうですか
　a 良好，　b 普通，　c 不良
2 あなたは身体の調子が何時も気になりますか
　a いつも気になる，　b 時時気になる，
　c 気にならない
3 あなたは夜よく眠れますか
　a よく眠れる，　b 大体眠れる，
　c あまりよく眠れない，　d 不眠症にかかっている
4 あなたは朝起きた時疲れを感じますか
　a いつも感じる，　b 時時感じる，
　c 感じない
5 あなたは頭痛がしますか
　a よくする，　b 時時する，
　c しない
6 あなたは鼻がつまって考えがまとまらないことがありますか
　a よくある，　b 時時ある，　c ない

7 あなたは頭がのぼせて考えがまとまらないことがありますか
a よくある， b 時時ある，
c ない

8 試験は何時も不思議とあなたの身体の調子の悪い時に当るような気がしますか
a よくする， b 時時する，
c しない

9 あなたは試験の前や最中に下痢をしますか
a よくする， b 時時する，
c しない

10 近所の人があなたの噂をしているように感じますか
a 何時も感じる， b 時時感じる，
c 感じない

11 自分の家の附近を歩くと人がじろじろ見ているように思いますか
a 何時も思う， b 時時思う，
c 思わない

12 あなたは自分の将来のことについて他人から聞かれた時はどんな気持がしますか
a 平気だ， b うるさい，
c とてもいやだ

13 あなたはたいていの友人が本来利己的なものだと思いますか
a よく思う， b 時時思う，
c 思わない

14 あなたは友人と雑談する時間を惜しいと思いますか
a 何時も思う， b 時時思う，
c 思わない

15 あなたは試験の成功・失敗と日常生活の小さな出来事と関係があるように思いますか
a 何時も思う， b 時時思う，
c 思わない

16 あなたは素質や運命の不平等について考えたことがありますか
a 何時も思う， b 時時考える，
c 考えたことがない

17 あなたは自分の予感が適中するように思いますか
a よく思う， b 時時思う，
c 思わない

18 あなたはぼんやりとあてのないことを考えるのが好きですか
a はい， b どちらでもない，
c いいえ

19 あなたは子供の時の楽しい思い出にふけることがありますか
a よくある， b 時時ある，
c めったにない

20 自分の力の足りないことが気になりますか
a よく気になる， b 時時気になる，
c めったに気にならない

21 あなたは自分を可哀想だと思うことがありますか
a よくある， b 時時ある，
c めったにない

この受験神経症傾向インヴェントリーの粗点を出すために，各項目につき神経症的な傾向に対する積極的肯定に2点，消極的肯定に1点，否定には0点を与えた。ただ第3問の採点は，c，dともに2点を与えた。

このようにしてえられた受験神経症インヴェントリーの得点を予備校および高校生徒についてみると，**表34**に示されたような結果となる。この表より次のようなことがいえる。すなわち高校生徒の受験神経症傾向は14.9で代表されるのに対し，予備校生徒は平均16.8であり，予備校生徒の方が神経症傾向はやや高いとみられる。この差は1％以下の危険率を以て有意であるといえる。このことはしかし当然予期されることであり，特に問題としてとりあげるまでもなかろう。

6.5.2. 予備校生徒の受験神経症傾向 つぎにこのような受験神経症傾向の得点と，他の調査項目に対する反応との関係を，とくに予備校生徒について検討してみよう。

睡眠との関係 受験神経症傾向の高いものは当然，睡眠が充分にとれていないのではないかと予測される。調査項目19番の「あなたの睡眠時間は充分ですか」という質問に対し，「充分である」と答えたものは58％で，その受験神経症インヴェントリーの得点は平均 16.38であったのに対し，「不充分である」と答えたもの42％で，その得点は 19.75にも達した。この差は1％の危険率で有意であった。すなわち神経症傾向の高いものは，睡眠を充分にとっていないと考えら

表34 得　点　布　表

学校	高校									予備校							
学年	洛北2年生		洛北3年生		鴨沂3年生		計			平安・京都・近畿					計		
得点＼性別	男	女	男	女	男	女	男	女	合計	18才	19才	20才	21才以上	女	男	女	合計
0～5	3	0	7	1	0	2	10	3	13	0	4	1	1	0	6	0	6
6～10	24	5	34	3	7	3	65	11	76	3	26	12	0	2	41	2	43
11～15	27	7	66	20	20	3	113	30	143	15	77	21	10	7	123	7	130
16～20	23	18	45	17	13	2	81	37	118	17	78	27	10	8	132	8	140
21～25	17	3	15	2	6	2	38	7	45	7	34	11	5	7	57	7	64
26～30	6	1	3	1	3	0	12	2	14	3	16	5	0	1	24	1	25
31～35	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	6	0	1	0	8	0	8
計	101	34	170	44	49	12	320	90	410	46	241	77	27	25	391	25	416
平均	15.4	16.2	14.1	15.2	15.8	12.6	14.8	15.2	14.9	17.5	16.8	16.2	17.1	17.6	16.8	17.6	16.8
標準偏差	6.6	6.2	5.2	4.3	5.4	6.6	5.7	5.0	5.6	5.4	5.0	5.7	5.5	5.1	5.9	5.1	5.9

れる。睡眠時間は前にものべたように，一般に予備校生の方が高校生より短かいが，予備校生で平均6時間半余りである。しかもこの時間もインヴェントリーの得点の高いもの，すなわち神経症傾向の高いものほど，時間が短かい傾向がある。高校生と予備校生と併せて平均すると，得点が0～5のもの8.19時間，6～10のもの7.61時間，11～15のもの7.66時間，16～20のもの7.52時間，21～25のもの7.13時間，26～30のもの7.11時間，31～35のもの6.00時間と，睡眠時間は次第に短かくなる傾向にある。

不合格の場合の処置との関係　「もし今度不合格だったらどうしますか」という質問に対する答と，このインヴェントリーの得点とはどのように関係しているだろうか。予備校生徒については大体つぎのような結果がえられた。（ただしこの予備校生は416名中200名をランダムに抽出し，それについて結果を求めた。）

a　「来年やり直す」と答えたもの　35%　17.6
b　「翌翌年やり直す」と答えたもの　1.5%　13.0
c　「どこでも入れる学校へ入る」と答えたもの　44%　17.7
d　「うけるのをやめて就職する」と答えたもの　13%　19.0
e　無記入のもの　6.5%　17.6

これをみると，進学を断念して就職をせざるを得ないものは，神経症傾向が高いようであるが，カイ自乗ではaとd，またはcとdの差は2.5前後で，5%の水準で有意な差があるとはいえなかった。また翌翌年にうけなおすと答えた者のテストの得点は13.0で，非常に呑気のようにみえる。しかしこれは数が非常に少ないので，有意な差があるとは必ずしもいえない。一般的な傾向は，しかし，これらの結果からうかがえるであろう。

家庭の経済状態との関係　家庭の経済状態は実際に調査したものではなく，被調査者に自らの家庭について記入させたものであるから，主観的なものであることは免れない。しかしとにかく，そのようにして得られた返答と，受験神経症傾向とは，**表35**のような関係にあった。すなわち家庭の経済状態のよいものは，神経症傾向が低いようである。この差は5%で有意である。受験神経症傾向というようなものも，家庭の経済状態―主観的であるにしろ客観的であるにしろ―によって大いに左右され，良好な経済状態はある程度その傾向を防ぎ，悪い経済状態は神経症傾向を助長するということは，受験生活への適応を問題にする時，重要

表35　家庭の経済状態と受験神経症傾向との関係

経済状態	人員比	インヴェントリー得点
上	8.0%	14.3
中	77.5%	18.2
下	13.0%	18.4
無記入	1.5%	13.0

な手掛りとなるであろう。

6.5.3.受験神経症傾向の因子分析　つぎに受験神経症傾向がどのような因子から構成されているかをみるために，これを因子分析にかけて検討してみた。まず被験者としては予備校生徒の中より男子 200名をランダムに抽出し，この生徒の受験神経症インヴェントリーの得点について，各項目間の相関を求めた。その結果は**表36**に示されている。相関係数は各質問に対する反応を適宜（＋）（－）に分割し**表37**参照，それらの間で4分割相関 r_t (tetrachoric correlation coefficient) を求めた。因子分析は Thurstone の完全重心分析法 (complete centroid method) により行

表36　受験神経症インヴンエトリー項目間内部相関表

（N＝200）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
1		.73	.59	.58	.33	.15	.60	.45	.51	.06	.05	-.20	.01	.25	.46	.23	.01	.07	.32	.45	.20
2	.73		.74	.62	.09	.14	.39	.47	.46	.18	.29	.02	.10	.20	.27	.36	.14	.42	.23	.27	.10
3	.59	.74		.39	.40	.38	.46	.41	.37	.22	.28	.18	.18	.21	.38	.03	-.03	-.04	.34	.29	.18
4	.58	.62	.39		.56	-.05	.77	.30	.25	.46	.30	-.15	.11	.04	.15	.42	.04	.18	.49	.40	.47
5	.33	.09	.40	.56		.06	.36	.39	.12	.12	.06	-.01	.21	.17	.19	.23	-.08	.11	.12	.30	.23
6	.15	.14	.38	-.05	.06		.28	.10	-.41	.14	.18	.07	-.04	.05	.11	.03	.00	.03	.01	.02	.07
7	.60	.39	.46	.77	.36	.28		.35	.48	.38	.31	.18	.15	-.01	.26	.33	.30	.17	.15	.29	.14
8	.45	.47	.41	.30	.39	.10	.35		.50	.28	.24	.12	.32	.22	.51	.25	.08	.11	.18	.22	.36
9	.51	.46	.37	.25	.12	-.41	.48	.50		.37	.56	.01	.20	.04	.57	-.09	.07	.03	.25	.25	-.04
10	.06	.18	.22	.46	.12	.14	.38	.28	.37		.77	.25	.34	.05	.35	.12	.04	.16	.13	.16	.25
11	.05	.29	.28	.30	.06	.18	.31	.24	.56	.77		.27	.36	.10	.28	.09	-.05	.23	.40	.17	.21
12	-.20	.02	.18	-.15	-.01	.07	.18	.12	.01	.25	.27		.09	.09	-.01	.16	.16	-.03	-.08	.19	.24
13	.01	.10	.18	.11	.21	-.04	.15	.32	.20	.34	.36	.09		.29	.11	.12	.08	-.04	.20	.16	.23
14	.25	.20	.21	.04	.17	.05	-.01	.22	.04	.05	.10	.09	.29		.25	.33	-.22	-.14	.03	.15	.16
15	.46	.27	.38	.15	.19	.11	.26	.51	.57	.35	.28	-.01	.11	.25		.30	.00	.10	.20	.32	.24
16	.23	.36	.03	.42	.23	.03	.33	.25	-.09	.12	.09	.16	.12	.33	.30		.07	-.17	-.23	.24	.25
17	.01	.14	-.03	.04	-.08	.00	.30	.08	.07	.04	-.05	.16	.08	-.22	.00	.07		.10	.16	-.13	-.01
18	.07	.42	-.04	.18	.11	.03	.17	.11	.03	.16	.23	-.03	-.04	-.14	.10	-.17	.10		.38	.19	.09
19	.32	.23	.34	.49	.12	.01	.15	.18	.25	.13	.40	-.08	.20	.03	.20	-.23	.16	.38		.01	-.02
20	.45	.27	.29	.40	.30	.02	.29	.22	.25	.16	.17	.19	.16	.15	.32	.24	-.13	.19	.01		.49
21	.20	.10	.18	.47	.23	.07	.14	.36	-.04	.25	.21	.24	.23	.16	.24	.25	-.01	.09	-.02	.49	

なった。また主対角線値には相系関列列の各列の最大絶対値を挿入した。因子数を決定するに当っては，相関係数の有意性の検査を基準として使用した。かくしてえられた重心因子行列が**表38**に示されているものである。さらにこの因子行列を軸回転により直交性単純構造 (Orthogonal simple structure) を示すように分析したのが**表39**である。統計的には第Ⅳ因子まで有意であったが，心理学的な解釈の都合上，軸回転後は第Ⅲ因子までにとどめた。

つぎにこれらの因子が，一体何を意味するものであるかを吟味してみよう。第Ⅰ因子と第Ⅱ因子はともに項目1から4まで及び7番の，身体的な質問に関係し，第Ⅲ因子がこれらの項目に負荷をもたないことがまず注目される。このことから，第Ⅰ，第Ⅱ因子ともに精神身体的な症状の著るしい何らかの型を代表するものではないかと考えられる。第Ⅰ因子と第Ⅱ因子のちがいは，第Ⅱ因子が頭痛がするという項目に対して負荷をもっているのに対し，第Ⅰ因子がもたないこと，下痢に対しては逆に第Ⅰ因子に負荷があって第Ⅱ因子にないことなどが，手掛りとしてあげられる。第Ⅰ因子の型は，近所の人が自分の噂をする(10)とか，じろじろみる(11)など，社会性の面でうまく行かず，自己の中に閉ぢこもって，「子供の時の楽しい思い出」に耽ったり(19)，白昼夢にふけったり(18)，自分の予感が適中したりするように思うことが多い。この型はつまり自信は喪失しないが社会的にうまくいかな

表37　反応二分割表

	+	−
1	c	a b
2	a	b c
3	c d	a b
4	a	b c
5	a b	c
6	a b	c
7	a b	c
8	a b	c
9	a b	c
10	a b	c
11	a b	c
12	b c	a
13	a b	c
14	a b	c
15	a b	c
16	a b	c
17	a b	c
18	a	b c
19	a	b c
20	a	b c
21	a b	c

表38　重心因子行列

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	h^2
1	.67	.41	−.30	.26	.7070
2	.71	.15	−.29	−.12	.6107
3	.68	.21	−.23	−.16	.5594
4	.72	.08	−.32	.13	.6272
5	.46	.24	−.06	.19	.2728
6	.18	.17	−.20	−.43	.1013
7	.72	−.10	−.30	.19	.6184
8	.65	.09	.15	.19	.4531
9	.52	−.30	.14	.38	.3800
10	.57	−.44	.27	−.14	.5914
11	.60	−.57	.27	−.26	.7578
12	.18	−.19	.27	−.29	.1414
13	.36	−.17	.29	.11	.2426
14	.26	.29	.32	.10	.2541
15	.57	.09	.28	.17	.4114
16	.35	.38	.24	.13	.3245
17	.10	−.30	−.22	.15	.1484
18	.24	−.20	−.28	−.20	.1760
19	.38	−.27	−.36	.12	.3469
20	.50	.22	.17	−.15	.3273
21	.44	.20	.29	−.19	.3177

表39　直交性単純構造

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2
1	.34	.76	−.10	.7032
2	.49	.61	.06	.6158
3	.40	.63	.06	.5605
4	.55	.57	.07	.6323
5	.16	.49	.07	.2706
6	.14	.25	−.14	.1017
7	.63	.44	.18	.6229
8	.19	.52	.38	.4509
9	.33	.16	.50	.3845
10	.33	.09	.68	.5794
11	.42	.02	.76	.7544
12	.01	−.01	.37	.1371
13	.07	.13	.46	.2334
14	−.23	.39	.22	.2534
15	.06	.47	.44	.4181
16	−.18	.52	.16	.3284
17	.35	−.14	.03	.1430
18	.42	.03	.01	.1774
19	.58	.08	.05	.3453
20	.03	.51	.26	.3286
21	−.07	.45	.33	.3163

い。その代償行為として自己に閉ぢこもって白昼夢にふけるのが好きといった型ではなかろうか。

第Ⅱ因子は前にものべたように頭痛を訴える型の神経症をあらわすが，この型では試験が不思議と自分の身体の調子の悪い時に当る気がしたり（8），試験の成功失敗と日常生活の小さな出来事が関係するように思ったりする（15）。いわゆる縁起をかつぎたくなる型であろう。そしてこの型の神経症は素質や運命の不平等が気になったり(16)，自分自身が可哀想になったり(21)　自分の力の足りないことが気になる(20)。どちらかといえば自信をなくする型である。また友人と雑談する時間を惜しいと思っている(14)が，別に近所の人に噂されているとか，じろじろ見られていると思わず，空想にも耽ったりしない。

このような特徴から第Ⅰ，第Ⅱ因子に適当な名称を与えるのは困難であるが，第Ⅰ因子はどちらかというと迷走神経緊張型（Vagotonie）の傾向，第Ⅱ因子は交感神経緊張型（Sympathikotonie）の傾向にあると考えられるかもしれない。また興味深いことには，頭がのぼせるという訴え（7)は両因子ともに負荷を示すが，鼻がつまって考えがまとまらないという項目(6)

はいずれの因子にもほとんど負荷がない。

第Ⅲの因子は特に社会的な不適応を意味しているようである。1から7までの一般健康状態に関する項目に殆んど負荷がなく，一番負荷の高いのが人からじろじろ見られる（11）という項目であった。また人が自分の噂をしているように思ったり（10），人から自分の不安定な将来について聞かれたりすることに非常に神経質になっていやがる（12）。友人が本来利己的なものであるという項目にも負荷があった。それに下痢（9）に高い負荷がみられるのは，身体的な項目の外に全然負荷のない第Ⅲ因子としては，注目すべきことである。下痢という現象が他の生理的な症状とは少し異なり，特に受験神経症と関係が深いのではないかと推察される。

以上のような分析より，一般に受験神経症傾向と広くいっても，その中にいろいろの型があり，いろいろの因子を含んでいることがわかる。しかしこれらの考察は今後の詳しい検討への一つの手掛りとなるものであり，この分析が最終的な性質のものでないことはいうまでもない。これらの神経症傾向が一般の神経症傾向と同じものかどうか，またこのインヴェントリーにおさめられた以外の神経症的徴候が，これらの三つの因子とどのような関係にあるのかなどの問題は，今後医学の協力を俟って検討されねばならないであろう。